

## 歴史ものアラカルト

今月は鎌倉&藤沢の文豪の話をしようと思いましたが。しかし、嬉しいことに図書館には大量の本やら写真集がたくさんあった。あまりにも沢山あるのでどこから手をつけて良いか？わからない。もう少しお待ちください。

今日は3つの歴史探訪をしてみます。特に有名地でなくとも日本のアチコチに長い歴史と文化を感じる場所（城、倉庫、神社仏閣、お墓）があります。そこが外国人にも人気な理由です。近代国家の日本の側面と古い長い伝統、文化、信仰が街角に残る日本です。

### 1. 静岡市立歴史博物館は見ごたえある

今年は猛暑で10月も末だというのにまだまだ暑い。10/26、つまりKが今年3回目の入院して2日後に恒例の静岡の実家のメンテナンスに行く。病院にいれば安心、私は存分に用事を済ませられる。前日に新幹線切符をチケット屋で購入し、また、両隣にお土産を購入した。静岡の実家の草取りはすぐに終わった。昨年11月に姉がイタリアに帰国時に除草剤を撒いておいた。今年は良く効いた。部屋の中のゴキブリの死骸を3つ処理して30分もしないうちに完了した。郵便受けに不要な選挙やDMが多い。両親は12年前に亡くなっているが、まだしつこく両親宛の手紙が来る。断るのもたいへんだ。

時間があるので、2023.4月にオープンした静岡市立歴史博物館(図1)に行く。駿府城の外堀にあるこの施設はNHKの「どうする家康」のブームにのって、TVでも何回か取り上げていた。今まで駿府城に博物館が無かったが不思議です。駿府城にはなかったが、浅間神社と久能山東照宮に今川家と徳川家の宝物があった。駿府城からは遠いのであまり訪れる人は多くは無いと思います。やはり駅近の駿府城に欲しいのは市民の願いです。幼稚園時代、この駿府城や堀で存分に遊んでいた。



図1 静岡市歴史博物館は駿府城そば



図2 博物館1fの戦国時代の築城あと

入場料、一般600円で入館する。1Fには戦国時代の築城の石垣の発掘がそのままの状態で見学できる(図2)。これは迫力がある。2Fから本展示で、写真撮影NGだった。面白い地図があった。江戸初期の頃のヨーロッパ人が作った日本の地図だ。地図上には都市が3つ記入してあった。江戸、駿府、京都の三都市だ。

家康64歳の時隠居して江戸城から駿府城に移った。大御所として駿府に存在感があった。将軍がいる江戸や、天皇がいる京都では都合が悪い打ち合わせや外国(主に朝鮮)の使節団が来日した時に駿府で会見していた。清水港も軍港の役割があった。静岡市には外国人のための施設がたくさん残っている。私の本籍がある西草深町は駿府城の外堀のすぐ近くの武家屋敷跡でした。近所にパリ外国宣教師会の静岡支部があった。両親はここで洗礼をうけた。子供のころから教会は身近に感じる生活圏でした。

静岡県には6つの新幹線の駅があるが、のぞみは止まらない。残念です。江戸時代なら駿府駅にのぞみが必ず停車したはずです。

2Fから富士山がよく見えた。初夢の縁起物「一富士二鷹三茄子」は家康が言った言葉です。鷹狩りの銅像(図3)が駿府城にあります。親戚の川根節子おばさんは駿府城そばの鷹匠町に住んでいます。ナスは折戸茄子(三保半島の折戸地区)が有名です。家康は64歳で隠居し、75歳で死去するまで大御所として駿府城から睨みをきかせ影響をもっていた。展示内容は3人の戦国武将(甲斐国の武田信玄、駿河の今川義元、三河の徳川家康)の品がありました。静岡地元では今川義元の人気は高くない、やはり家康が人気であり、商売上の売りとなっている。欲を言えば立派だった駿府城の天守閣が欲しい。再建してほしい(図4)。

### 徳川家康の履歴書

8歳 今川義元の人質として11年間、19歳まで駿府で暮らす

18歳 今川の家臣の娘と結婚

19歳 桶狭間の戦いで織田信長が今川義元を討ち取る

49歳 江戸城に入る

59歳 関ヶ原の戦いで勝利

62歳 征夷大将軍となり江戸幕府を開く

64歳 征夷大将軍辞職、秀忠にゆずる

66歳 駿府城を築く

大御所となり駿府城から裏政治を動かす

75歳 死去(当時としては長生き)



図3 駿府公園にある鷹狩りの家康銅像



図4 天守閣跡の発掘現場、かなり大きかった

## 2.辻堂の耕余塾コウヨジユクを知ってびっくり

長年藤沢に住んでいるが辻堂駅前にある明治記念館の2Fの資料室に入るのは初めてでした。単に時間潰しに入った建屋です。1Fは市役所の出店になっていて、2、3Fが資料室や会議室になっている。2Fに辻堂界隈の歴史資料館があった。中でも大きく展示してあるのが耕余塾コウヨジユク(図5)であった。全く知らなかった。読むと、萩、津和野にある松下村塾のような塾でした。

### 耕余塾/耕余義塾(こうよぎじゅく)

神奈川県高座郡羽鳥村(後の明治村。現在の藤沢市)に、明治時代にあった私塾。神奈川県屈指の中等教育機関であった。漢学、英語、数学、理科、西欧史、法制などを教え、寄宿制、小中学一貫教育の私学で、1887年(明治20年)に「耕余義塾」に改組されると共に、慶應義塾の福沢諭吉の門下生を教員として迎え入れ、久保市三郎らが教鞭を振るい、慶應義塾にならって義塾と校名につけた。

この塾から排出した人物がすごい。

主な塾生

吉田茂 - 内閣総理大臣(図6)

中島信行 - 衆議院議長

中島久万吉 - 商工大臣、古河電気工業初代社長

鈴木三郎助 - 味の素創設者

鈴木忠治 - 味の素第2代社長、内閣顧問

山梨半造 - 陸軍大将、陸軍大臣

平野友輔 - 衆議院議員

山田嘉毅 - 衆議院議員・神奈川県高座郡会議長



図5 明治記念館の資料展示- 耕余塾

金子角之助 - 藤沢町長

村野常右衛門 - 自由民権運動家

大島正徳 - 哲学者

化学系の学生としては味の素の会社を創業したのが鈴木三郎助とその子が科学史として面白い。鈴木商店は海藻(昆布)からヨードを精製していた薬品会社であった。その時、昆布の旨み成分を研究していた東京大学化学科の池田博士と昆布繋がりで出会い、博士が発見した旨み成分のアルギン酸ナトリウムを鈴木商店で商品化した。旨みの味覚を国内外に定着させ、その味がアルギン酸ナトリウムであることを発表した。二代目の鈴木三郎助は、1909年に味の素の事業を開始。その後の発展はご存じのとおり。これをきっかけにして鰹出汁(イノシン酸)、椎茸(グアニル酸)の旨み成分が次々と発見される。



図6 耕余塾の売りは吉田茂首相

### 3.永勝寺～藤沢宿の飯盛女の墓～で江戸時代を知った

妻が入院している藤沢市民病院は旧東海道の藤沢宿のど真ん中にあるから近くに寺院も多い。その中で浄土真宗の永勝寺がある。飯盛女の墓(図7)があることで有名だ。私もぶらりと訪れて初めて知った。ネットの説明には以下が書いてあった。

#### 飯盛女

江戸時代の旅籠で給仕をしていた女性。遊女としての側面があった。永勝寺にある飯盛女の墓39基のうち、38基は1761年(宝暦11年)から1801年(享和元年)までに建てられたもの。

お墓はお寺の一角に大きな榆の木の下にひっそりと質素にある。年号が刻まれている。江戸時代の年号に疎い。そもそも江戸幕府が開いてから政治の中心は江戸に移ったので京都の天皇の存在が希薄です(私の中では)。だから、どの天皇の時代にどの年号なのか？さっぱりわからない。調べてみると以下の対応がありました(天皇と元号一覧(令和と元号の決め方)サイト)。

写真のお墓(図8)は宝暦11年(1716年)11月27日だから、この時代の天皇は桃園天皇である。当時、庶民にとって徳川将軍と天皇はどんな存在であったのだろう。ニュースも投票もないから生きていく上で関係は全く無い。辺境な農家で生まれた女性が首都圏に出稼ぎに来る道が飯盛女であった。農家にとっても口減しの意味合いがあったのだろう。それが普

通の世界だった時代です。今なら貧困女子の救済と称して国や市町村が税金で、あるいはユニセフが国際援助してくれる。幸せな時代です。



図7 永勝寺の飯盛女の墓



図8 或る女の墓石 宝暦11年

次ページにつづく

#### 4. 神奈川近代文学館を見学しました

2023.12/13に横浜 港の見える丘公園の中にある神奈川近代文学館を見学しました。かなりよかったです。特に、芥川龍之介の自筆の草稿の『鼻』、『蜘蛛の糸』があった。彼の書画もよくできている。多才な人です。

神奈川県に縁がある文豪はたくさんいます。驚きました。吉川英治（歴史物をたくさん読みました）も横浜の庶民の出身でした。当時の写真や筆記用具や原稿があつてワクワクしました。大佛次郎関係は隣の大佛次郎記念館の展示が本家です。



図9 神奈川近代文学館(横浜)

ワープロもネットも無い時代の執筆は相当に根気と才能が必要です。書斎にある大量の資料が私を圧倒します。びっしりと原稿の余白に書き込んだ推敲の後が生々しい。樋口一葉は推敲魔で、余白に白紙を貼って直すので原稿が立体的になった逸話があります。この文学館の訪問を薦めます。ぜひ、見に来てください。展示内容は以下です。

神奈川近代文学館

<https://www.kanabun.or.jp>

入館料 260en

青字：増田が沢山読んだ記憶がある作家です。

コーナー展示「没後50年 大佛次郎展—戦後の仕事—」

常設展「文学の森へ 神奈川と作家たち」

##### 第1部 夏目漱石から萩原朔太郎まで

明治維新～関東大震災まで：

夏目漱石、森鷗外、北村透谷、島崎藤村、国木田独步、与謝野晶子、泉鏡花、志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎、斎藤茂吉、高浜虚子、北原白秋、萩原朔太郎

##### 第2部 芥川龍之介から中島敦まで

芥川龍之介、横光利一、川端康成、永井荷風、谷崎潤一郎、岡本かの子、吉川英治、堀口大學、西脇順三郎、中原中也、小林秀雄、堀辰雄、中島敦

##### 第3部 太宰治、三島由紀夫から現代まで

現在活躍中の作家たちが現代の神奈川を舞台に描いた作品を紹介するコーナー併設。

太宰治、坂口安吾、島尾敏雄、大岡昇平、安部公房、三島由紀夫、澁澤龍彦、山本周五郎、開高健、庄野潤三、石原慎太郎、五木寛之、村上龍、島田雅彦、柳美里